

藤井良彦 博士（文学）学位請求論文審査報告書

論文題目：『メンデルスゾーンの形而上学 ―神の存在の「新しい学的な証明」―』

本論文における著者藤井氏の見解は、ドイツの哲学者モーゼス・メンデルスゾーン(1729 - 1786)の主著『朝の時間、あるいは神の現存在に関する諸講義』(1785年)——以下『朝の時間』と略称する——における「神」の存在証明を中心に考察することによって、メンデルスゾーンの哲学、あるいはむしろ形而上学に関する哲学史的ないしは思想史的な評価を転換することである。

この企図がもつ意義を理解するには、歴史的な背景ないしはコンテクストを考慮しなければならない。18世紀、とりわけその後半から19世紀にかけてのドイツは、カントの批判哲学（その基礎を置いた『純粹理性批判』の出版は1781年）から始まりドイツ観念論にいたる、人類史上稀に見る哲学の隆盛期であったことは言うまでもない。

だが、18世紀ドイツ哲学を全体として見るに、カントの哲学の活動が生じた基盤であり、やがて批判哲学によって圧倒されていった「講壇哲学」の存在は無視できない。それは、ライプニッツ哲学をヴォルフが体系化した「ライプニッツ・ヴォルフ哲学」と従来の哲学史では概括されるが、実のところ、批判哲学が世に出る以前の、ドイツの諸大学における哲学の動向は、ヴォルフ派と反ヴォルフ派との対立を軸に展開していったと見ることができる。

しかし当時の哲学思想の状況を正確に捉えるには、こうしたアカデミズム内部の動向にはとどまらず、ドイツ啓蒙主義——その中心地の名を冠して「ベルリン啓蒙」とも言われる——の在野の思想家たちの活動を視野に入れなければならない。その主要人物の筆頭は、劇作家、批評家にして哲学者のレッシングであろうが、その無二の盟友がメンデルスゾーンであったことが、彼の哲学思想の位置を示している。

だがこれに加えるに、メンデルスゾーンの哲学思想には、ユダヤ人としての出自からする複雑な事情がある。18世紀ドイツにおいてユダヤ人が市民社会に参入する、その端緒を開いた第一人者がメンデルスゾーンなのである。後代からはその「同化」の傾向を批判されることになるが、メンデルスゾーンを欠いては、18世紀以降のドイツにおけるユダヤ人の歴史を語ることはできないであろう。

ともあれ、メンデルスゾーンはラビにより教育を受けた後、アカデミックな教育を受けてはおらず、すべて独学によって、当時のドイツにおける哲学の主要人物の一人となったのであり、そのことは、ベルリン・アカデミーが1762年に公募した懸賞論文において最後まで競ったカントを押さえて入賞したのが彼であったことからして、察知されよう。これを契機にメンデルスゾーンはカントと文通を始め、それは彼の死に至るまで続く。カントは『純粹理性批判』を公刊した折には一冊をメンデルスゾーンに献呈したのであった。

以上からして、従来の哲学史におけるメンデルスゾーンの位置づけは、まず「啓蒙哲学者」、ライプニッツ・ヴォルフ哲学を踏まえつつ、それを旺盛な文筆活動によって通俗化する「通俗哲学者」といったところであり、最晩年の主著『朝の時間』においても、カントの批判哲学を理解できず、ついに旧套を脱し得なかった〈時代遅れ〉の哲学者といったところが通念である。

この通念を覆すことが本論文における藤井氏の見解である。そのために同氏は、『朝の時間』、それに到るまでのメンデルスゾーンの哲学的な諸論文を周到緻密に読解したのである

が、その中心的論題が「神」の存在証明なのである。——だが、これに関しても歴史的な連関を考慮することが必要であろう。

西洋近代哲学の開祖デカルトは、純粋な思考の働きである「自我」を哲学の第一原理として定立したが、次いで彼はこの第一原理にもとづいて「神」の存在を証明し、然る後この「神」にもとづいて、彼が創始した「自然学」の客観的妥当性を根拠づけている。学知の哲学的根拠づけは「神」なしには成し遂げえない、というのであった。

その際デカルトは、「神」の存在証明を三つ提示しており、そのうちの一つが著名な「存在論的証明」である。これは、図式的に言うなら、「最も完全な（すべての完全性を具えた）存在者」という「神」の「観念」（ないしは「概念」）にもとづき、「必然的な存在」を「完全性」（ないしは「実在性」）として捉えることによって、「神」が必然的に存在することを結論するものであり、中世哲学このかた、そして近代哲学においても、デカルト以降盛んに論じられたトピックであった。

『純粋理性批判』におけるカントの功績の一つは、「神」の存在証明の諸々の試みを整理しつつ、「存在論的証明」が最も根本的なものであることを突き止め、これを論駁したことにあつた。その論拠こそは、「存在」は「完全性」ないしは「実在性」として捉えることはできないという著名なテーゼである。

だが問題なのは、こうしたカントによる「神」の存在証明の論駁という華々しい功績の陰で、メンデルスゾーンが最晩年に『朝の時間』において到達した「神」の存在証明の意義が看過されていることである、というのが藤井氏の基本的な見方であり、それを「新しい学理的な証明」として顕示することによって、メンデルスゾーン哲学の「形而上学」としての真面目を顕揚することを同氏は企てたのである。すなわち、『朝の時間』での「神」の存在証明は、カントが論駁したとされる「存在論的証明」ではなく、メンデルスゾーンが長年かけて彫琢した独特の「像論」にもとづく証明であり、そのかぎりカントが論駁した「独断的形而上学」とは一線を画する独自の「形而上学」にこそメンデルスゾーン哲学の真面目は存するというのである。

以下では、この主張を論証するために本論文において繰り広げられたテキスト分析と考察の概要を簡潔に見ていくことにする。

第一章においては、上述したベルリン・アカデミーの懸賞において入賞した論文「形而上学の明証性について」（1762年）の内容が、そこでの「神」の存在証明を焦点として考察されている。それは要するに、「ライプニッツ・ヴォルフ哲学」の枠内での「神」の存在証明に終始するものであることが見極められている。

ところで1762年にカントは『神の現存在の唯一可能な証明根拠』を出版したのだが、これが、メンデルスゾーンにとって「神」の存在証明を再考する契機となったことを明らかにするのが、「カントの『証明根拠』に関する書評(1764年)」と題された第二章である。周知のように、カントの当該著作においては、「存在」は「完全性」ないしは「実在性」として捉えることはできないというテーゼが提示され、『純粋理性批判』での「存在論的証明」の論駁が先取りされているのであり、これがメンデルスゾーンの思考に大きな刺激を与えたというのである。

そこから出発したメンデルスゾーンの思考の活動が漸く一定のかたちを取ったのが「ア・

プリアリに論証された神の現存在」(1778年)という小論なのであるが、これはマルクス・ヘルツ宛の書簡に添付されたものであった。ヘルツは、ケーニッヒスベルクにおけるカントの聴講生にして重要な文通相手として知られ、ベルリンに移住してからはカント哲学の代弁者的な役割を演じたのであり、カントとメンデルスゾーンとを仲介したと見られる。この小論での「神」の存在証明において、「概念の主観的な思考可能性」という道具立てが使用され始め、これが後に独特の「像論」へと発展することになることが、第三章では解明されている。

だがそこに到るまでには、なお紆余曲折があり、それは具体的にはスピノザ、ランベルト、レッシングとの哲学的な対決として展開されたことが、以下の諸章では論じられる。メンデルスゾーンの諸テキストのみならず、彼と哲学的に交渉のあった哲学者たちの諸テキストにも周到に目配りする藤井氏の研究姿勢は、高く評価されるべきであろう。

さて、『エティカ』を主著とするスピノザの哲学が18世紀のドイツ哲学にとってもった意義は端倪すべからざるものであるが、そもそもドイツの知識人にそれが知られる端緒となったのが、「汎神論論争」である。周知のように、それは、晩年のレッシングがスピノザ哲学の信奉者であるかどうかをめぐる、最初メンデルスゾーンとヤコービとの間で、後にはドイツの学識者全体を巻き込んで展開された論争である。これは複雑な様相を呈する論争であるが、第四章では、まず、メンデルスゾーン哲学の初発に位置する『哲学対話』(1755年)などに遡って、そこでのスピノザの「汎神論」への対応の仕方が確認されている。

残りの第五章から第九章までは『朝の時間』の考察に充てられるのだが、全体で十七の講義から成る当該著作のうちの第一三講から第一五講においても、スピノザ哲学が取り上げられ、しかもそれは「純化されたスピノザ主義」としてのレッシング哲学との対決へと連なっていることが解明されている(とくに第八章)。

すなわち、『朝の時間』の第一講から第七講がメンデルスゾーン独自の「像論」の展開であり、第八講から第一二講、それを承ける第一六講と第一七講、において「神」の存在証明が展開されている。その間に挟まった第一三講から第一五講は、「汎神論論争」への対応のため挿入された言わば夾雑物であるという観を呈しているのだが、藤井氏はそこに、メンデルスゾーンの「像論」が彫琢される過程において不可欠であった、スピノザやレッシングとの哲学的な対決の反映を見て取り、それが当該の「像論」にもとづく「神」の存在証明にとって重要な意義をもつことを解明しているのであって、メンデルスゾーン哲学の発展史的な連関の解明への重要な寄与と見ることができるであろう。

さて『朝の時間』第一講から第七講の考察には第五章が充てられているのだが、そこではメンデルスゾーンの「像論」がランベルトの「現象学」との対決となっていることが論じられている。ランベルトは、カントと同時代の哲学者、物理学者、天文学者、数学者として、カント哲学に多大の影響を与えたことで知られるが、その哲学的な立場が「真理を仮象から区別する理論」としての「現象学」にほかならない。その「仮象」に関する議論を批判するところに、メンデルスゾーンの「像論」の独自性の一端を藤井氏は見ているのである。

では、以上のようにして成立した「像論」とはいかなるもので、それが「神」の存在証明にどのように寄与するというのか。

第六章、第七章、第九章の論述からすると、概ね次のように見ることができるであろう。——スピノザの「汎神論」においては、万物が神の様態と見なされるのだが、これに反対してメンデルスゾーンは「私の思考」は神の様態ではないと主張する。レッシングの「純化さ

れたスピノザ主義」においては、神のうちに万物が「像」として写し出されていると見なされるのだが、それに反対してメンデルスゾーンは、「私の意識」だけは神によっても「像」化されることはないと主張する。小論「ア・プリオリに論証された神の現存在」において「概念の主観的な思考可能性」という表現で模索されていたのは、こうした神によっても「像」化されることのない「思考する」「主観」、ないしは「自己意識」であるかぎりでの「私」であったと見られる。

メンデルスゾーンは「表象 - 対象」という道具立てを斥け「模像 - 原像」というそれへと換えている。この「像論」によれば、現われているのはことごとく「像」であって、それが「像」と見なされるかぎりにおいては「現象」なのだが、それがなんらかの「対象」を写し出すと見なされるならば「仮象」となるのであり、ここにランベルトの「現象学」への批判があった。「像」としての「現象」だけが存在するのであり「原像」はフィクションとなりかねないにもかかわらず、「自己意識」としての「私」だけは神によっても「像」化されえざる「原像」としての位置を占めることが自覚されるというのである。これが「私の原像的な現存在」の自覚にほかならない。かくしてメンデルスゾーンの形而上学とは、「自己意識」を「原像」として認める、言うならば「自我論的な像論」の体系であって、ここにこそ「ライプニッツ・ヴォルフ哲学」には解消されえない独自性がある。

だがしかし、「私」に現象する「像」、すなわち「模像」も、やはり「原像」から展開されたものと考えざるをえない。「私」の有限性からして、もはや「像」としては現象することのない、言わば未展開の「原像」を認めざるをえないのであり、ここから、そうした「原像」を一挙に「像」化している神の存在が帰結するであろう。

こうした議論は、大観するならば、「自我」の有限性・不完全性の自覚に徹するうちで「無限者」である「完全者」たる「神」への通路が開けるというスタイルをもつかぎりにおいて、デカルトによって切り開かれた近代形而上学の原型の反復の一形態と見ることができようが、これをメンデルスゾーン形而上学のうちに看取したことは、大きな功績として認めることができると思われる。しかもそれが、きわめて難解な一次文献の系統的で緻密な読解によって相応に裏づけられていることからして、十分な哲学的な業績であり、博士（文学）の学位に相当するものであると認めるものである。

以上

平成 27 年 2 月 13 日

主査 立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授 湯 浅 正 彦
副査 立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授 松 永 澄 夫
副査 立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授 村 田 純 一